サンの協同と分配

— 女性の生業活動の視点から —

今 村 薫*

Co-operation and sharing among the Central Kalahari San: Observation on the women's subsistence activities

Kaoru Imamura**

This paper is a contribution to the study of patterns of co-operation and sharing among the Central Kalahari San. It offers an analysis of social and economic transactions among women during the gathering of wild plants and while cooking.

During the gathering of wild plants there is little co-operation. Each woman does the work by herself. However women go gathering plants together. In picking them up and digging them out they synchronize their behavior. I argue that this synchronization forms the basis for co-operative behavior and sharing in San society.

When cooking women offer frequent help to one another. The food they prepare is consumed in groups larger than the household. Analysis of the interactions during cooking reveals that the food is distributed on a reciprocal basis according to the closeness of the relationship when they were working together.

Co-operation itself can be analyzed as a form of sharing: namely as the sharing of activity. This overall 'sharing system' is maintained, not by formal rules, but by face-to-face interaction.

1. はじめに

協同と分かち合い (sharing) は狩猟採集民の社会を解明するための中心的課題とされているが (Wilson, 1975), これらは個別に、かつ部分的に論じられることが多かった。例えば Leacock and Lee (1982) は、狩猟採集民に共通して見られる特徴として「分かち合いの平等主義的パターン」や「個人の尊重と結びついた協同の重要性」などを挙げているが、これらが具体的にどのような現象のことを指しているのか、また、分かち合いと協同が相互にどのような関係にあるのかは明らかにされていない。本論文は、ボツワナ共和国カラ

ハリ中央部に住む狩猟採集民サンを対象に、さまざまな「行為や物のやりとり」を分析することによって、協同と分配を貫く行動原理を解明することを目指したものである。

狩猟採集民の協同と分配については、おもに男性がおこなう狩猟活動を中心に記載されてきた。協同は、大型動物の狩猟と運搬、解体においておこなわれる (Marshall, 1976; Lee, 1979; Tanaka, 1980)。また、分配については、狩猟で得た肉の分配が報告されている (Marshall, 1960, 1976; Tanaka, 1980; Osaki, 1984)。

サンにおける肉の分配は、狩猟での役割や親族関係に応じて義務的になされるものである (Marshall, 1961, 1976; Tanaka, 1980)。しかし、この第一次分配の後、各世帯の女性によって調理され

* 京都大学理学部人類進化論研究室

** Faculty of Science, Kyoto University

た肉は、採集植物やトウモロコシ粉などの他の料理と同じように、義務とは別の次元で分け与えられると予測される。

分配をふくめた「分かち合い」には2つのタイプがある。ムブティ・ピグミーにおいて報告されているように、狩猟で得た獲物は肉の各部から内臓に至るまで、厳密な規則に従って義務的に分けられる(市川, 1982)。一方、クン・サンにおいては、hxaro と呼ばれる1対1の個人的な親密な関係によって、物品の贈与がおこなわれている(Lee, 1979; Wiessner, 1982)。この論文では、肉の分配に示されるような「義務的な分配」と、hxaro において見られるような「自発的な供与」とを対比させて検討する。

採集や料理のようにおもに女性に関わる活動において、協同や分配についての記載は、これまでの研究ではほとんどなされてこなかった。たとえば採集活動は、一人ですべておこなうことのできる自己完結的な行為なので、狩猟活動などと比べて協同作業の必要性が少なくと考えられてきた。また、採集で得られた野生植物は、家族単位で消費され、世帯をこえた分配はされないと報告されている(Marshall, 1976; Tanaka, 1980)。

狩猟と採集という男女の生業形態の違いは、男性にみられる協同と分配を通じた他者との積極的な交渉と、協同を前提としない女性のつき合いという対比を連想させ、この対比はサンの訪問活動などで見られた「女は血縁親族に固執し、男はそれを越えた広い社交世界を志向する」という男女の差異に対応するという(菅原, 1986)。

しかしながら、採集活動においてさえ、サンの女性は集団で行き、採集地では採集作業以外の社会的活動にも多くの時間を費している(今村, 1992)。彼女たちは決して社交性の少ない世界に生きているわけではない。

この論文では、第1に女性の活動である採集と調理を中心に、これらの活動に見られる協同や分配の実態と特徴を明らかにする。そのために、採集や調理に参加する人々の相互行為全般の分析をおこない、ある場を共有する人々の行動の特質を考察する。

第二に、これまでそれぞれ独立の事象として記述されてきた協同行動と分配を、一つのシステムの中に相互に関連させて位置づけたい。採集物が収穫されてから調理され、分かち合って消費されるという一連の流れに注目し、その中で協同や分配がどのようにおこなわれるかという点に焦点をあてる。

以上の分析を通して採集と採集物をめぐる女性の交渉の世界を描き出すとともに、協同と分配を一連の流れの中で相互に関連づけることにより、サンの社会-経済システムの動態を解明したい。

2. 調査地の概要と方法

2-1 調査対象と調査地

セントラル・カラハリ・サン(G/wiとG/ana)は、著しく乾燥した環境に適応した生活を営む狩猟採集民であり、その生態と社会については、田中, Silberbauerによって詳細に研究されてきた(田中, 1971, 1978; Tanaka, 1976, 1980; Silberbauer, 1972, 1981)。彼らは、1970年代までカラハリ族(バントゥー系のツワナ族の一支族)との接触をのぞいて、ほとんど外部世界と接触せず完全に自給自足的な狩猟採集生活を送っていた。しかし、ボツワナ政府の遠隔地開発計画により、1979年より≠Kade地区に井戸が整備されて定住化が始まった。さらに、1982年より干ばつ救済としてトウモロコシ粉を主体とした食料が配給されて定住化が促進され、また、道路工事や民芸品製作から得られる現金収入に生計を依存させるようになってきた(Osaki, 1984; Tanaka, 1987)。

調査対象地の≠Kade地区は、セントラル・カラハリ動物保護区の中央部にある。本研究のもととなるデータは1990年7月から1991年2月までのおよそ8カ月間、≠Kade地区内において収集したものである。また、1988年から1989年にかけて約10カ月間収集したデータも随時参照した。

1990年には≠Kadeには38個のサンのキャンプ(空間的まとまりを持った個々の居住集団)と周辺地域から移住してきたカラハリの7つのキャンプとが散在していた(図1)¹⁾。1990年7月の≠

図1 ≠Kade 地区

Kade 地区の人口は、サンが621人（男性 302人、女性 319人）、カラハリが147人（男性 80人、女性 67人）で、合計768人であった。ただし、そのうち約80人は他の集落を長期間訪問中であつたり、道路工事現場へ働きにいており不在だった。

対象集団である Camp T の居住者の総数は33人

であり、その性、年齢構成は表1に示したとおりである。男女は、既婚者と未婚者に分け、既婚者のうち、明らかに老齢な者（老年）と、それ以外（壮年）に分けた。未婚の女性は、初潮²⁾以降の「青年」と、初潮以前の「子ども」に分けた。未婚の男性は、未婚女性の年齢区分に準じて分けた。

表1 Camp T の性・年齢構成

世帯	既婚				未婚				合計
	老年		壮年		青年		子供		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
A	1	1							2
B				1			2	1	4
C	1			1			2	1	5
D		1							1
E		1							1
F	1	1					1		3
G		1							1
H	1	1							2
I			1	1			1	1	4
J			1	1					2
K					3				3
L							5		5
合計	4	6	2	4	3	0	10	4	33

*性・年齢クラスの定義については、本文参照。

Camp Tのメンバーの家系を図2に示す。

Camp Tの成員の全員を研究対象としたが、一部の成員が長期訪問をおこなったり、道路工事に従事しており不在であった。NKとEKは、道路工事で働いており、月末の数日以外は≠Kadeにいない。HOと2人の妻(GkとOt)、および、HOの息子夫婦(SNとDa)は6月下旬から12月1日までの5カ月あまり、≠Kadeから南西に約200kmのところにあるKa/gaeという集落を訪問していた。Haは夫のEKを訪ねて、≠Kadeから西に約15km離れた工事現場に1月12日から2月12日まで滞在していた。Kaは息子夫婦がすんでいる≠Kade内のCamp Iに、10月16日から11月25日まで訪問していた。

キャンプのメンバーシップは定住した後も流動的である。1988年にCamp TはCamp Oから分裂した。そのときCamp Lから分裂した世帯Fと、すでにCamp Pから分裂していた世帯A、B、Cと

図2 Camp Tのメンバーの家系図

合併し、Camp TはCamp OとCamp Lの間に新しいキャンプを設定した。Camp Tはほぼ東西に小屋が散らばっており、東端と西端の最も遠い小屋は約200m離れている。一方、Camp Tと南に隣接するCamp Lとの最短距離は約30mで、キャンプの空間的な輪郭は曖昧なものとなっている。このような空間的な配置が、人々の社会的配置とどのように対応するかについては、後ほど考察する。

2-2 調査方法

(1) キャンプ内での活動の記録

キャンプ内での活動を調べるために、総計7日間、7:00から19:00まで30分おきにキャンプ内全体を見回り、成人男性4人(TA, KM, HK, GO)、成人女性7人(Be, Kk, Ha, Gu, Ko, Ka, Na)を対象に、①活動内容、②1人であるか集団であるか、③集団である場合にはその構成メンバー、などを記録した(ただし、Kaは不在により4日間しか調査していない)。各々の30分おきの観察結果を1単位とする。活動内容は、休憩、工芸品製作、食事(紅茶を飲むことも含む)、調理、睡眠、水汲み、ヤギ管理、狩猟、採集、訪問、その他の11項目に分類した。「その他」の項目には、小屋の掃除や、灰捨て、小屋の修理などのキャンプ内での作業が含まれる。休憩、工芸品製作、食事、調理、その他は、キャンプ内での活動であり、水汲み、狩猟、採集、訪問はキャンプ外での活動である。ヤギ管理にはキャンプ内での活動(朝、ヤギを囲いから出す)とキャンプ外での活動(ヤギ探しや夕方の乳絞りなど)の両方がある(池谷, 1991)。

1人であるか、グループであるかは、その人が集まりに参加しているかいないかで決める。彼らは日中、日陰を求めて一本の木陰か、誰かの小屋に集まっていることが多いので、そのように人々が同じ木陰、あるいは同じ小屋にいる状態を1つの「集まり」と定義する。「集まり」は凝集性が高く、直径3m以内の円内に20人以上の人々が納まることも稀ではない。1人である状態とは、明らかに「集まり」から離れて1人で自分の小屋にいる場合などをさす。母親が自分の乳児とだけい

る場合は、1人であるときみなした。キャンプ外での活動も1人で行くか、グループで行くかによって2つに分けられる。

「集まり」のメンバーの記録から、キャンプ内での「同席示数」を次の式によって計算した。

キャンプにおけるAとBの同席示数 = (AとBが、ともに同じ「集まり」にいた単位数) × 100 / (AとBが、ともにCamp Tにいた単位数)

(2) 女性の採集活動の記録

(a) 出席表、収穫量

調査期間の全般にわたり、誰が採集に行ったかを調べた。ここでは、採集を目的に30分以上キャンプをあけたものを採集行(gathering trip)とした。採集行の出欠は77日間記録した。この出席表には同時にその構成メンバーを記録し、採集時の「同行示数」を算出した。

採集時のAとBの同行示数 = (AかつBが採集に行った回数) × 100 / (AまたはBが採集に行った回数)

また、個人ごとに採集物の収穫量(採集してキャンプまで持ち帰った量)をバネ量りではかった。

(b) 行動記録

18回の採集に同行し、採集行為(メロンをひろう、野草を摘むなど)、休憩、移動などの行動について、各個体ごとに1分単位で記録した。

(3) 食物分配

Guという1人の女性を対象に、彼女が誰にどんな食べ物を何回配ったかを記録した。

(4) 手伝いの記録

キャンプでおこなわれる調理や工芸品製作を手伝う行動を観察し、事例を記録した。

3. 日中の活動

日中の活動記録によると、男性は、7:00から19:00までの日中の時間の77.3%を、女性は86.9%をグループで過ごした(表2)。彼らは1人であることがほとんどないといってよい。サンは集団で

表2 日中の活動頻度

活動内容	男性			女性		
	集団	単独	合計 (%)	集団	単独	合計 (%)
休憩	234	6	240(34.4)	369	19	388(33.7)
工芸品製作	74	8	82(11.7)	41	7	48(4.2)
食事	106	0	106(15.1)	162	2	164(14.3)
調理	0	0	0(0)	127	7	134(11.7)
睡眠	43	15	58(8.3)	73	9	82(7.1)
水汲み	0	3	3(0.4)	9	19	28(2.4)
ヤギ管理	1	1	2(0.3)	15	2	17(1.5)
狩猟	39	30	69(9.9)	0	0	0(0)
採集	0	8	8(1.1)	105	32	137(11.9)
訪問	44	83	127(18.1)	86	47	133(11.6)
その他	0	5	5(0.7)	12	7	19(1.6)
合計	541(77.3)	159(22.7)	700(100.0)	999(86.9)	151(13.1)	1150(100.0)

*表中の数値は、観察単位数を表す。

いることへの一種の志向性を持っている。

男女とも日中の3分の1を休憩に費したが、そのほとんどは他人とのおしゃべりやシラミとりで過ごしていた。食事や調理、そして睡眠さえも、1人ではなく他人と共にいる状態でおこなわれた。水汲みは女性あるいは子どもの仕事だが、男性もすることがあった。男女とも1人で汲みに行く方が多かった³⁾。狩猟は、「集団」と「単独」でが半々であった。罾猟に行くときは1人で行く場合が多く、犬槍猟や騎馬猟に行くときはグループで行くからである。訪問は、男性は単独でおこなうほうが多く、女性はグループでおこなうほうが多かった⁴⁾。

女性は、日中の11.9%を採集に費す。これを時間に換算すると、1時間29分に相当する。また、単独で採集に行く場合より、グループで行く場合が多かった。

4. 採集活動

4-1 集団採集と単独採集

サンの女性が単独より集団で採集に行くことが多いことは、別稿(今村, 1992)において採集パーティ・サイズの分析から明らかにしたが、ここでは、個々の女性について単独で採集に行った回数と集団で採集に行った回数を比べた(表3)。Gu, Ko, Ka, Kk, Na, Haの6人は単独でも採集に行っており、採集という活動自身は1人でも充分遂行可能なものであることがわかる。しかし、どの女性も単独より集団で採集に行った回数の方が多かった。

4-2 集団の構成

この節では採集の社会的側面に焦点をあて、採集パーティのメンバーシップの分析をおこなう。

キャンプで盛んに交わされる「おしゃべり」の中で、野生植物の実り具合いや、誰がどこで食物

表3 単独採集と集団採集の頻度

個人名	集団採集	単独採集	合計	観察日数
Be ¹	0	0	0	77
Gu	29	6	35	77
Ko	23	9	32	77
Ka ²	12	2	14	56
Kk	25	11	36	77
Na	17	4	21	77
Ha ³	16	3	19	57
Gk ⁴	13	0	13	36
Ot ⁴	12	0	12	36
Da ⁴	8	0	8	36
Nk(O) ⁵	9	-	9	
Ks(M) ⁵	9	-	9	
Kr(K) ⁵	7	-	7	
Kb(L) ⁵	1	-	1	
Mt(B) ⁵	2	-	2	
Nt(G) ⁵	3	-	3	
Ug(U) ⁵	3	-	3	

1 Beは老齢のため、採集に行かなかった。

2 Kaは10月16日から11月25日まで他のキャンプを訪問していた。

3 Haは1月12日から2月12日まで道路工事で働いている夫を訪問していた。

4 6月の終わりから12月2日まで他の集落を訪問していた。

5 対象キャンプのメンバーと一緒に採集に行った別のキャンプのメンバー。

()内にキャンプ名の略号を記した。

を採集してきたかなどの採集に関する情報が話題にのぼる。そして、採集についての情報交換のうちに、翌日誰とどこへ採集に行くかが決まる。

このように食物採集のパーティはメンバーがあらかじめ決まっている場合が多いが、当日になって参加することも可能である。また、採集に行く途中で、通過するキャンプの女性に加わる場合もある。どのような場合も採集に参加するか否かは個人の自発的な意志によるものであり、他の人は強要できない。

集団で採集に行くときは、他のキャンプの女性と一緒に採集に行く場合もある。それぞれ属するキャンプの異なる7人の女性が、対象キャンプの女性と採集に行った。とくに、Kkの娘のKs(M)とGkの娘Kr(K)、隣接キャンプのNk(O)の3人は、対象キャンプの女性と採集に行った回数が多かった(表3)。

採集に7回以上行った12人(表3)を対象に、二者間の同行示数を求めた(表4)。Camp Tの9人については同行示数がゼロであるペアが非常に少ないことから、同じキャンプの女性とは少なく

表4 採集の際の同行示数

個人名	Gu	Ko	Ka	Na	Kk	Ks*	Ha	Da	Gk	Ot	Nk*	Kr*
Gu	-	39.6	8.9	14.3	7.6	6.8	3.8	4.8	4.9	18.9	11.6	5.0
Ko		-	2.2	8.2	3.0	2.3	6.3	2.5	2.6	5.1	15.4	0
Ka			-	9.4	11.1	4.0	3.1	9.5	37.5	4.5	12.5	10.5
Na				-	9.6	3.1	14.3	25.0	3.6	7.1	6.3	27.3
Kk					-	26.3	25.0	0	4.8	7.1	11.4	2.4
Ks(M)*						-	15.2	10.5	5.3	10.5	8.7	5.6
Ha							-	3.7	0	0	10.3	0
Da								-	6.3	0	4.5	45.5
Gk									-	13.3	10.5	0
Ot										-	4.8	0
Nk(O)*											-	0
Kr(K)*												-

* 別のキャンプのメンバー。

図3 採集時のソシオグラム

* はCamp T以外の女性。表4より、Kimura & Ihobe (1985)の方法により作成した。1本線は同行示数が、 m (9.2)から $m+SD$ (18.2), 2本線は $m+SD$ から $m+2SD$ (27.2), 3本線は $m+2SD$ より大きいものを示す。

とも1回は一緒に採集に行っていることがわかる。

しかし、高頻度で一緒に採集に行くペアは必ずしも同キャンプに属しているとは限らない。また、Camp Tの女性どうしが採集行において一様に付き合っているとはいえず、採集パーティのメンバーシップにはクラスターが生じていた(図3)。誰とでも偏りなく採集に行くNk(O)のをぞく11人は、①Gu-Ko-Ot, ②Gk-Ka, ③Kk-Ha-Ks(M), ④Da-Kr(K)-Naという4つのクラスターに分けられた。

このようなクラスターを形成する要因を、年齢と血縁関係の2点から検討する。年齢は、子どもの大半が成人に達しているGu, Ko, Ot, Gk, Kaの世代(推定50歳代以上), 長子だけが成人に達しているKk, Nk(O)の世代(推定40歳代), そして子どもがすべて成人前であるHa, Na, Da, Kr(K), Ks(M)の世代(推定20歳代から30歳代前半)の3つに分けられる。

3親等までの血縁関係を検討すると、母娘はKa

-Na, Kk-Ks(M), Gk-Kr(K)の3ペアであり、姉妹はKk-Haの1ペア, 叔母めいはGu-Kk, Gu-Ha, Ka-Nk(O)の3ペアである。

以上の世代と血縁関係から、クラスターが生じた要因を検討すると、Kk-Ha-Ks(M)のみ母娘、姉妹の血縁の集まりであり、それ以外はすべて同世代の集まりであるといえる。同世代の意味するものは、採集経験、採集能力、採集ベースがほぼ同じであるということである。採集物の発見力や、運搬力などの採集能力に著しく差がある女性どうしは一緒に採集に行かない傾向があった。たとえばKaとGkの2人は、以前大病を患ったとかで身体の不調を訴えることが多く、採集にはこの2人で行く場合が多かった。

4-3 採集地での人々の行動

グループで採集に行った人々はどうのように関与し合うのだろうか。採集作業の合間の休憩では、女性たちは1つの木陰に座り、水やタバコの回し

飲み、採集物のつまみ食い (snacking)、シラミ取り、おしゃべり、歌や踊りなどをにぎやかに繰り広げて一種の社交の場を形成している。一方、採集作業そのものにおいてはどのような相互作用がおこなわれるのだろうか。

明らかに「手助け」とみなせる行為として、①他の女性がおぶって連れてきた子どもの世話をときどきみてやること、②採集が終わって荷物を担いで立ち上がるとき、他人の手を引いて助け起こしてやること、③背に担がれた他人の荷物をくずれ落ちないように直してやること、それぞれ数回観察された。

しかし、これらの助け合いも採集活動全体の中では頻度としてわずかであり、しかも必ずしも必要とするものではない⁵⁾。グループで採集に行った場合も単独の時と同じように、具体的な採集場所の決定から、野生植物の発見、根茎掘りや野草摘みなどの採集行為、採集物の荷造り、そして運搬を、基本的には誰の指示も助けも受けずにおこなっていた。

では、彼女たちは互いの行動に無関係に自分の採集活動だけに没頭しているのだろうか。採集は

目的に応じた特定の採集地でおこなうが、移動の最中にも採集をおこなう。その移動時の行動に注目すると、ほぼ同時期に同じ採集行動をとっていることがわかった (図4)。これは野生植物の分布がしばしば集中していることにも原因の1つとして考えられるが、いたる所に広く分布している野草の *nao* (*Oxygonum alatum*) や *kyun* (*Ledebouria* sp.) についても同じように同調しあう行動が観察された。

女性たちは移動に専念しているときや林の中を歩くときは一列縦隊で歩くが、草原に出たときや採集物を探している時は散らばって前進する。彼女たちは誰かが採集を始めてもそれを見過ごして先に進むこともあり、「強迫的に」他人の行動を真似ているわけではない。彼女たちが行動を同調させたのは、ただ、他人の採集行動を契機に自分も採集する気になったからであろう。このような半ば無意識の行動の同調性 (あるいは伝染性) は動物学において「社会的促進 (social facilitation, Thorpe, 1963; Kummer, 1971)」と呼ばれる現象に似ている。

社会的促進が、特定の二者間で相互に触発し合

図4 移動しながらの採食

いながら進行する場合もある。その例を以下に示す。

事例1 90年10月21日

Ha, Na, Kk の3人で小屋用の草取りに行く。HaとNaは途中でKkとはぐれ、2人で草の採集地を目指して歩いていた。

- 9:33 Haが!om/eを発見し、すわって根茎を掘り始める。
- 9:33 Naもすぐに掘り始める。
- 9:42 Haが根茎(約500g)を掘り出す。Naがそれを見て「大きい」と叫び、「わたしも欲しい。」と言う。
- 9:45 Naが掘り出すが、小さい(約100g)。
- 9:51 Haが中くらい(約300g)のを掘り出す。
- 9:54 Naが先ほどから掘っていたが、見つからないので、立ち上がって別のところを掘り始める。
- 9:55 Haが「掘り尽くされてもうない。やっと1つ見つけた。」と言って、別のところを掘り始める。
- 10:00 Haが大きな根茎を掘り出す。Naが掘る手を休めてのぞき込む。
- 10:01 Naが掘り出す。また小さい。Naが「小さい。アー」とぼやく。
- 10:04 Haが大きいのを掘り出す。Naが、それを見て「こんなもんよ⁶⁾」と言う。
- 10:06 Naが中くらいのを掘り出す。
- 10:11 Haが中くらいのを掘り出す。
- 10:14 Naが中くらいのを掘り出す。Haが「Naよ、草を摘みに行こう。」と言う。
- 10:18 NaとHaが掘りながら、私に「!om/eを掘っていると長く居てしまう。Kkは、今ごろとくに草を集めているだろう。」と言う。
- 10:21 Haが大きな根茎を掘り出す。
- 10:27 Haが再び大きいのを掘り出す。NaがHaに「こんなもんよ。わたしに1つちょうだい。」と言う。
- 10:29 Naが中くらいのを掘り出す。
- 10:32 Haが小さいのを掘り出す。

10:35 Naが大きいのを掘り出す。しかし、中空になっており、かじると苦いので「腐っている。」と言って捨てる。

10:36 Haが中くらいのを掘り出す。

10:40 Kkが、こちらにやってくる。Naは自分が掘った分を1つにまとめ、Haに「わたしにちょうだい。」と言う。

10:44 Naが大きな根茎を掘り出す。KkがNaに「わたしにちょうだい。」と言う。それからKkはHaの赤ん坊(男子)を抱いてあやしながら「男よ、わたしに!om/eをちょうだい。」と言う。

10:48 NaとHaが、!om/eを掘るのをやめて草を摘みにこの場を去る。今度は、Kkが1人残って熱心に!om/eを掘る。

11:38 KkがNaとHaに合流する。HaがKkの!om/eを見て、「アー、わたしの分まで掘り尽くしてしまったよ。」と言う。

この日の3人の!om/eの収穫量は、Kk, Ha, Naの順に、3.5kg, 3kg, 1.5kgだった。3人の間に分配はみられなかった⁷⁾。

NaとHaの間には!om/eの根茎をめぐる競争が生じたかのように見える。しかし、HaはNaより多くの根茎を掘ったことでNaを打ち負かしたわけではなく、NaもHaを押し退けてでもより多くの根茎を得ようとしたわけではない。サンの文化には競争的な要素はほとんど含まれないことがしばしば指摘されているが(Draper, 1976; Shostak, 1981) 採集活動もその例外ではなく、他人より多く採集することより「自己の行動の完成」を目指していると考えられる。したがって、この2人の間に生じた相互作用は競合というより、むしろ「励まし合い(mutual encouragement)」ととらえることができよう。2人は互いを巻き込みながら!om/e掘りそのものに行動を集中させている。このような「励まし合い」は、単調な採集行動を集中して長く続けることを可能にしている。

「励まし合い」は心理面だけでなく、実利的な収穫量にまで影響を及ぼす。個人ごとに採集物の収穫量の平均値を集団採集と単独採集の場合とで比較した(表5)。単独採集の場合、個人差は歴

表5 単独採集と集団採集における収穫量
(キログラム)の比較

個人名	単独採集	集団採集	Mann-Whitney's U
Gu	18.2 (5)	26.0 (22)	12.5*
Ko	18.1 (9)	27.7 (19)	15*
Ka	10.0 (2)	25.6 (5)	0*
Nk	23.8 (11)	31.1 (13)	21.5*
Na	11.5 (4)	26.4 (13)	0*
Ha	17.0 (3)	26.7 (8)	2*

* 5%水準で統計的に有意。

1 単位はキログラム。

() 内はデータ数。

然としている。ところが、集団で採集に行くと、どの人も単独採集の場合より収穫量が有意に増加し、しかも個人差が縮まる傾向にある。これは、「励まし合い」により、他人と同じ時に同じ様に採集し、かつ、採集行動がエスカレートするからであると考えられる。

採集活動の同時発生だけでなく、作業の繰り返しの周期の一致も見られる(図5)。図5は小屋葺き用の草の採集地での行動記録である。女性たち

は木陰をつくる1本の樹をステーションに決めてから四方八方に草摘みに行った。そして両手で一抱え分草が集まると、ステーションまで自分の草を運び込み、少し休憩してから再び草を摘みにいった。この摘みにいってから戻ってくるタイミングが彼女たちの間で驚くほどよく一致している。

このような現象がおこるのは、この6人の間で草を摘む速さや摘みながら移動する速さ、草の運搬力などに差がないからだと解釈することもできる。しかし、このような技術面からの説明のほかに、女性たち自身が互いの行動を同調させて、作業をリズムカルなものにしている可能性を考慮する必要がある。

他人に行動を同調させ、作業をリズムカルにする手段として多くの文化で「労働歌」が知られている。サンの女性も採集しながら、あるいは採集の合間に歌声を交わすことがしばしばあるが(Tanaka, 1980: p. 113; 今村, 1991), 彼女たちはことさら歌声を合わせなくても、採集活動それ自体を同調させることによってリズムを刻むことができるのである。活動をリズムカルにすることは、作業への集中が増すだけでなく、仲間とともにいるという感覚を促進させることにもなるのである。

図5 作業周期の一致

図6 建材とりの際の分業

4-4 建材取りにおける協同

前節で述べたように、採集作業における助け合いの範囲は限られているが、小屋の建材取りにおいて明らかな協同作業が一例観察された(図6)。未婚女性のBa(K)とNo(K)の娘小屋(未婚の女性が共同生活を営む小屋)をCamp Tに建てるため、91年1月19日にCamp TとCamp Kの女性が一緒に建材取りに行った。

建材取りにおける作業は、採集地ごとに①木をオノ(ノノ)で伐り倒す、②枝をナタ(大型のナイフ, tsa:ga)で払って、柱状にする、③柱状になった木を集めてそろえる、④木を担いで次の採集地まで運搬する、の順に繰り返される。観察した例(図6)では、これらの作業の中で、オノで伐り倒す作業とナタで枝を払う作業において頻繁に人が交代した。6人の女性が3本のオノと2本のナタを使って、数分ごとに仕事を代わったり短い休憩をとったりしながら、作業を遂行した。この「協同作業」にはオノを使って木を伐ることだけを分担するといった「専門化」がみられず、数分ごとの6人入り乱れての交代は観察者には煩雑にさえ見えた。しかし、その「過剰」で複雑な

交代において、彼女たちは交代のタイミングと動作を実にスムーズにやっていた。サンの女性たちは主体的な行為者として他人と関わり、あたかも1人の人間がおこなっているかのように「息のあった」協同作業を展開していたのである。

5. キャンプでの活動

5-1 キャンプでの人々の集まり

採集で得られた野生食物は、ほとんどがキャンプで調理されてから消費される(採集食物の調理法については、今村(1992)を参照)。食物の調理から消費にいたるまでのプロセスには同世帯の家族だけでなく、同キャンプの成員やキャンプ外からの訪問者も頻繁に関与する。この章では、調理から消費までのプロセスに関与する人々の相互交渉の特質を明らかにしたい。まず、対象キャンプの人々の集まり方の特徴から検討する。

日中の人々の「集まり」における同席示数(表6)から、ソシオグラムを描いた(図7)。サンの男女はそれぞれ同性と近接し合うと指摘されてきたが(Marshall, 1976: p. 249; 菅原, 1984),「集

表6 キャンプ内での同席示数

個人名	KM	TA	HK	GO	Be	Kk	Ha	Gu	Ka	Ko	Na
KM	-	40.2	21.4	29.2	42.0	17.3	30.6	19.4	20.0	10.9	9.4
TA		-	43.2	33.8	4.6	1.5	2.4	18.7	21.7	35.1	18.2
HK			-	6.8	5.1	0.0	3.2	14.8	20.0	17.5	61.9
GO				-	0.0	2.0	3.5	14.8	9.1	1.4	2.5
Be					-	44.2	58.3	20.7	7.8	17.3	11.3
Kk						-	35.7	10.8	7.1	8.2	7.1
Ha							-	26.4	8.3	13.5	14.3
Gu								-	67.2	53.7	46.8
Ka									-	48.6	37.3
Ko										-	43.2
Na											-

図7 キャンプ内でのソシオグラム

表6より, Kimura & Ihobe (1985) の方法により作成した。1 本線は同席示数が, m (21.3) から $m+SD$ (38.7), 2 本線は $m+SD$ から $m+2SD$ (56.2), 3 本線は $m+2SD$ より大きいものを示す。

まり」⁸⁾の点からも同様の傾向が示された。

男女の分離は、ムブティ・ピグミーにおいて典型的に見られ、男性たちはキャンプでのほとんどの時間をテーレといわれるキャンプ中央部の公共の場で過ごすのに対し、女性たちは周縁部のおのおの小屋の前で過ごすという（市川，1982：pp. 199-202）。

たしかにサンにおいても男性は男性だけの集まりをつくり、そこへ女性から運ばれた料理を男性だけで食べるという光景は日常的によく見られる。しかし、サンの場合、男女が同じ小屋や日陰に集まって会話や食事を楽しむこともあり、とくに夫婦は2人で自分たちの小屋周辺で過ごすことが多い。図7のソシオグラムも、TA-Ko, KM-Be, HK-Naの夫婦は同じ集まりに参加していることを示している。また、近接の点からも夫と妻はよく一緒にいると報告されている（菅原，1984）。

以上から、サンの男女の空間的分離と夫婦の近接という特徴が再確認された。男女の空間的分離を生み出す要因について、菅原は近接における原理が、男女で異なっていると述べている。すなわち、「男性どうしはキャンプ内において親族関係とほとんどかわりなく相互に近接しあうのに対して、女性どうしの近接は血縁集団への著しい集中を見せている（菅原，1984：p. 132）」という。本研究における女性どうしの集まりは、Be-Ha-Kk に関しては母娘、姉妹関係が存在する。

しかし、もう1つのクラスターであるKo-Gu-Kaには血縁関係がない。また、BeとGuは姉妹だが同席数は平均より小さく、KaとNaは母子だが、両者はKoやGuとよりも多く一緒にいるわけではない。つまり、女性どうしの集まりを血縁だけで説明することはできない。女性どうしの集まりにも男性どうしの集まりと同様に、血縁関係以外の要因が働いていると考えられる。

5-2 食物の供与

サンの社会においては、狩猟でとれた肉は人々に分配すべきものであるが、植物性食物についてはそのような義務はなく、原則として家族単位で消費されると報告されている（Marshall, 1976:p.

97, pp. 295-303; Tanaka, 1980: pp. 95-96）。しかし実際は、食事の場に居合わせた家族外の人々もしばしば食物をふるまわれている。ふるまわれる食物の量は、「一口だけ」から「皿に盛られて満腹になる」までさまざまだが、いずれもその場で消費される。

Guを対象に、彼女が誰にどんな食物を供与したか、また、彼女が誰からどのような食物を供与されたかを彼女の食事（紅茶を飲むことも含む）の度に記録した⁹⁾。全部で140回の食事を観察し、このうち46回はGuが他人から食事を受け、94回は彼女自身が調理した（あるいは材料を提供した）。94回のうちGuが1人でおこなった食事は8回だけで、他の86回はGuが他人と一緒に食べた。Guはこの86回の食事で、延べ436人の成人に食物を供与した¹⁰⁾。

Guが他人に供与した食事を、13種類に分類した（表7）。彼らの食事には主食と副菜の区別とか、肉と野菜と一緒に煮たシチューといったものではなく、すべて単品で食べる。ただし、メイズ・ミールには、トウモロコシ粉にソルガムやヤギの乳、また、採集した//nanメロン（*Citrullus lanatus*）の果肉、粉にしたメロンの種、kxom（*Grewia*

表7 Guからの食物供与

	配った回数	延べ人数	平均人数
メイズ・ミール	31	155	5.0
煮豆	5	28	5.6
紅茶	14	73	5.2
ヨーグルト	1	8	8.0
<hr/>			
//nanメロン（生）	7	34	4.9
kanメロン（蒸し焼き）	4	23	5.8
根茎（蒸し焼き）	8	28	3.5
野草（臼でつく）	2	12	6.0
kyunの根（蒸し焼き）	1	1	1.0
イモムシ（炒る）	1	2	2.0
メロンの種（炒る）	1	1	1.0
樹脂	1	2	2.0
<hr/>			
肉	10	69	6.9
<hr/>			
合計	86	436	5.1

*//nan (*Citrullus lanatus*)

kan (*Acanthosicyos naudiniana*)

kyun (*Ledebouria* sp.)

flava) の実などを混ぜることもある。肉は、干し肉を火であぶったもの、生肉あるいは干し肉を鍋で煮たもの、鍋で煮た肉を杵でついて繊維をほぐしたもの、中・小型のレイヨウ類を熱い砂で蒸し焼きにしたものが食べられる。鍋を使って調理するメイズ・ミール、煮豆、紅茶、また、臼を使う kan メロンと野草は多人数に供与される。これらは調理していること自身が人目につきやすいという特徴がある。一方、根茎などは熱い砂に埋めたまま数時間ほっておかれ、空腹時に適宜とりだして少人数で消費される。

次に食物を加工食品（メイズ・ミール、煮豆、紅茶、ヨーグルト）、採集食物、肉の3種類にまとめ、それぞれがキャンプの「居住者」と「訪問者」に対して、また、「男性」と「女性」に対してどのように供与されるかを分析した（表8）。供与された食物の比率は、居住者と訪問者の間で有意な差が見られなかった（男性： $\chi^2 = 4.95$, $df = 2$, n.s.; 女性： $\chi^2 = 4.23$, $df = 2$, n.s.）。一方、男性と女性の間には明瞭に差があり（居住者： $\chi^2 = 12.6$, $df = 2$, $p < 0.01$; 訪問者： $\chi^2 = 16.0$, $df = 2$, $p < 0.001$ ）、男性は肉を、女性は採集食物を多く供与される傾向があった。

男性と女性で供与される食物に差が見られたが、男女で供与の場での行動に違いがみられるだろうか。肉については、延べ38人の男性が供与の場において38人全員が肉の供与にあずかった。一方、女性は延べ45人が供与の場にいたが、そのうち17人

は肉の供与を受けなかった（表9）。とくに女性の訪問客は肉を食べるのを「遠慮」していたように見受けられた。しかし、肉の供与を受けなかった17人のうち、16人は人々が肉を食べている時と同時に、あるいはその前後に、ヨーグルト、紅茶、根茎、メロンなどの食物を供されており、肉への欲求を強いて我慢している風でもなかった。

加工食品、とくに鍋で調理するメイズ・ミールと煮豆、紅茶は多くの人にもふるまわれる。その場にながら加工食品の供与を受けなかった人は延べ20人いたが（表9）、供与を受けた延べ264人と比較するときわめて少ない。供与を受けなかった女性18人のうち、10人は直前にGuあるいは他の女性のところですでに食事を供与されており、2人は自分の子どもに食物を提供された¹⁰⁾。また、3人はGuが食物を分けおえた直後に自分の小屋に帰ってメイズ・ミールなどの調理を始めた。これらは「受け手」の側でなんらかの遠慮をおこなったと考えることができるが、はっきりとGuから拒否された例が1例だけあった。この1例はHaがGuに「メイズ・ミールをちょうだい(tsaoo, 「乞う」の意)」と言ったが、Guは「いつもいつも乞われるのは疲れる」と答えて分けなかった。残りの女性2人、男性2人については供与を受けなかった理由はわからない。

Kitamura (1986) はサンの相互行為の特質として「相手の側からの自発的な働きかけを引き出そうとする配慮」をあげている。このような配慮は、料理の授受をめぐる人々のさまざまな行動の随所に見られる。料理が煮上がるころになると、調

表8 Guから食物供与を受けた延べ人数

	加工食品	採集食物	肉	合計
居住者 女性	112 (4)	52 (0)	24 (0)	188 (4)
男性	90 (20)	16 (0)	27 (2)	133 (22)
訪問者 女性	41 (2)	27 (0)	4 (0)	72 (2)
男性	21 (3)	8 (0)	14 (1)	43 (4)
合計	264 (29)	103 (0)	69 (3)	436 (32)

* () 内の数値は、食物の供与を受けた者の内、調理の場になかった者の延べ人数を示す。

表9 調理の場にいた延べ人数

	加工食品	採集食物	肉	合計
女性	165 (18)	100 (21)	45 (17)	310 (56)
男性	90 (2)	24 (0)	38 (0)	152 (2)
合計	225 (20)	124 (21)	83 (17)	462 (58)

* () 内の数値は、調理の場にいた者の内、食物を供与されなかった者の延べ人数を示す。

理の場にいた人々の数人は黙ってその場を去る。人々は互いの状況や与え手との関係を推察し合っており、自主的に料理を受ける人数を調節しているのである。したがって、料理が配られる場にいるということ自身が「供与を受けたい」というメッセージを担っていると考えられる。

料理が煮上がると2～3個の深皿につき分けられ、数人が1つの深皿から食べる。このとき、鍋から（すなわち与え手から）離れてすわっている人は、どれかの皿に加わることが可能であるが、あえて加わらないこともある。与え手も皿を自分と訪問者の中間あたりに置くことが多く、積極的に料理を勧めるとは限らない。かれらはこのような相互行為をおこなうので、観察者には行為者の意図を判断するのが困難な場合があるのである。

メイズ・ミールや煮豆は他人にふるまうのが当然と思われている点で、「義務的な分配」に近い。料理が煮上がると2～3個の深皿につき分けられ、そのうちの1～2個は男性の集まりに配られる。このとき、男性はその場にいらなくても料理を受ける（表8）。女性も「与え手」と頻繁に食物のやりとりをしていたり、材料の一部を提供していたりして分配を受けるのが当然である場合、分配の場にいらなくても料理が小屋まで届けられることがある（表8）。

一方、採集食物はその場にいなければ供与されない（表8）。採集食物は義務的に分配しなければならないものではなく、「その場限りの」相互交

渉で自発的に供与される。その場にいて供与されなかった男性はいなかったが（表9）、これは男性が採集食物に積極的な嗜好を示すからではない。むしろ、女性だけがいるときに女性だけで採集食物を食べることが多いからである。その場にいて供与されなかった女性は延べ21人いた（表9）が、採集食物は1つの根茎を数人で一口ずつかじったり、遅れて集まりに加わった女性が数人でメロンを食べたりするような、ごく少量での軽食程度である場合が多い。したがって、その場にいる人すべてに分配しなければならないような強制力を持つものではない。

以上から、食物が供与される場に男性と女性に関与する仕方の違いが浮き彫りになる。女性は食物が供与される場にともかく多く参加しようとしている。その結果、女性は供与を受けない回数も多いが、供与を受けた回数も男性より多い（表10）。男性は与え手との相互交渉に頼らなくても、「男性の集まりには女性は料理を提供する」というルールによって料理の供与を受けることができる（表8）。また、調理の場にいた場合、食物を供与される率は女性より高い（表9）。

食物が供与される要因を検討するために、Guから供与を受けた個人のリストを作成した（表11）。対象キャンプの居住者全員と訪問者の上位男女それぞれ3人の供与を受けた回数を挙げたが、この表から同じキャンプの住人であっても、Guから頻繁に食物の供与を受けた人とそうでない人との「親

表10 食物の供与を受けた回数、受けなかった回数

	供与の 対象者数	供与を受けた		供与を受けなかった	
		延べ人数	平均回数	延べ人数	平均回数
居住者 女性	9	188	20.9	30	3.3
	男性	9	133	14.8	2
訪問者 女性	23	72	3.1	26	1.1
	男性	19	43	2.3	0
合計	60	436	7.3	56	0.9

表11 Guから食物の供与を受けた人

食物を供与 された回数(T) 日数(D) ¹ 頻度(T/D)			
(女性)			
Ko	50	37	1.35
Na	43	37	1.16
Ka	38	28	1.36
Ha	14	23	0.61
Be	11	37	0.30
Da	11	24	0.46
Ot	8	24	0.33
Gy	8	24	0.33
Kk	5	37	0.14
Kb(L)	13	-	-
Ks(M)	7	-	-
Ng(L)	6	-	-
(男性)			
TA	36	37	0.97
NK	18	14	1.29
HK	18	37	0.49
GO	17	37	0.46
KT	14	37	0.38
KM	13	37	0.35
HO	10	24	0.42
SN	6	24	0.25
EK	1	9	0.11
NS(L)	11	-	-
KH(P)	6	-	-
NU(N)	4	-	-

¹ 観察した37日の内、キャンプTに実際にいた日数

疎」があることがわかる。また、他のキャンプからの訪問者は確かに居住者より供与の回数が少ない傾向があるが、訪問者の上位3人は居住者の下位3人に匹敵する。この場合のキャンプの境界とは、Guからみた親疎の連続帯に曖昧に線引きしたもので、はっきりと「内と外」を分けるようなものではない。居住者と、訪問者がそれぞれ明瞭なまとまりをもっているわけではなく、1人の与え

手からの親疎の連続帯の中に居住者と訪問者が個人として位置づけられているのである。したがって、同じキャンプの居住者であることは相互交渉を進める基盤にはなるが、観念的なカテゴリーとしての「居住者」が食物供与の理由になっているとはいえない。

では、血縁関係は要因になりうるだろうか。Guの息子のNKは、高い頻度で供与を受けていることから、血縁関係も要因の1つとして否定できない。しかし、Guにとって姉であるBeや姪であるHaとKkより、全く血縁関係のないKoや血縁関係の薄いKa, Naの方が頻繁に供与を受けているのは、血縁関係では説明できない。

GuとKo, Ka, Naは、「キャンプ内で長時間共にいる間柄」でもある。この3人はGuとキャンプ内での同席示数においても上位の3位を占めている(表6)。居住者のうちGuとの同席示数がわかっている10人について、同席示数と供与を受けた頻度に有意な相関が見られた(Spearmanの順位相関係数 $r_s = 0.634$, $n = 10$, $p < 0.01$)。つまり、頻繁に側にいる人に対して頻繁に食物を分け与えているといえよう。頻繁に側にいるとは相互行為の機会を増やすことであり、食物の供与が個人間の相互行為によって進められていることを意味する。

Guは46回他人から食物を供与されたが、その内の30回はKoから、6回はNaから、4回はKaから、残りの6回はそれぞれ1回ずつ6人の女性から受けたものである。KoはGuと食物供与において互酬的な関係にあり、彼女たちの「親しさ」は行為だけでなく物のやりとりによっても強化されているといえよう。

GuとKo, またGuとNa, Kaの間の食物供与は、少なくとも調査期間中は均衡のとれたものではなかった。ただし、長期的にみればそれらは均衡するものであるかもしれず、「環境変異への保険(Wiessner, 1982; Cashdan, 1985)」の機能を持つ可能性も否定できない。しかし、彼女たちが保険を明確に意図して食物供与をおこなっているとは考えがたい。

彼女たちの行為や物のやりとりの交渉は、観念

的なカテゴリーとしての居住集団や、親族構造などの別の構造に支配されているのではなく、その交渉の中で生じる個人間の関係によって築かれるものなのである。

5-3 自発的な手伝い

キャンプでおこなわれる調理には、多くの人が気軽に手伝いをおこなう。毎日食べられるメイブ・ミールの調理および後かたづけを例にとると、①火おこし、②鍋の調達（誰かのところから借りてくる）、③トウモロコシ粉と水の用意、④鍋を火にかけて水を注ぐ、⑤火加減の調節、⑥沸騰した鍋にトウモロコシ粉を入れてよくかき混ぜ、練り上げる、⑦火からおろして蒸らす、⑧深皿の用意、⑨粥を皿に分ける、⑩粥の入った皿を配る、⑪鍋と皿を洗う、⑫灰を捨てるといった、一連の「小さな」作業の1つ1つを鍋を囲んで座っている人々が自発的に手伝う。これらの手伝いは、調理をしている本人にとって必ずしも必要なものではなく、その意味で「過剰な」手助けともいえる。また、手伝ったからといって料理の供与を受けるとは限らず、見返りを期待して手伝っているとは言えない。

手伝うだけでなく、トウモロコシ粉や水、薪といった材料を提供したり、鍋や臼を貸したりして物品で関与することもある。Camp Tには10世帯（若者小屋を除く）が住んでいるが、全部で4個の鍋と4個の臼しかなく頻繁に貸借をおこなう。とくに鍋はそれぞれ大きさが異なるので、人々は料理の量にあわせて鍋を使い分けており、誰の鍋ということに関係なく鍋がキャンプの中を行き交う。

このように多数の人が物や行為を媒介として1つの調理のプロセスに関与しているので、誰の料理をつくっているのか一見してわからないこともある。とくに採集食物を調理するときは、複数の女性が材料を持ち寄り、その食物が誰のものか曖昧になりがちである。以下にその例を示す。

事例2 91年1月24日 Guの囲いにて

- 13:48 Kaがkan メロンと//nan メロンと/gara (*Dipcadi* sp.)を採集してくる。Gu, Ko, Na, Be, Na, !Ganashie, !Naoshie

(O) (3人とも少女)でKaのとってきた//nan メロンを食べる。

- 14:06 Naが少女3人と酸味のある≠naoを採集に行く。Ka, Gu, Ko, Beは、/garaの葉と茎を分ける。
- 14:48 Beが立ち去る。
- 14:55 Naと少女3人が≠nao (*Oxygonum alatum*)を採集して戻ってくる。
- 15:02 Gkが酸味のある≠o:ri (*Ximenia caffra*)の実を持ってくる。
- 15:20 Naが≠o:riの実の皮をむき、さらに種子と果肉を分け始める。
- 15:21 Tonaki (K) (少女)がGuの臼を持ってきてGkにわたす。
- 15:22 Guが、Gkに杵をわたす。
- 15:22 Gkが/garaを臼に入れてつき始める。
- 15:30 GanashieがKoの小屋からコップに水を汲んで来て臼に注ぐ。
- 15:30 Naが≠o:riの果肉を臼に加える。
- 15:34 Gkがトロロ状になった/garaを2つの深皿に分ける。1つめの深皿からはTA, HO, KM (3人とも対象キャンプの老年男性)、//Na:ma (少年)の4人が、2つめの深皿からはKa, Na, Koが食べる。臼からNa, Gk, Gu, 少女4人が食べる。
- 15:40 Gkが臼の内側を木の葉で拭いてからGuに臼を返して、自分の小屋に帰る。

この事例を/garaの調理における物と行為の交渉について整理する(表12)と、8人が物を提供し、10人が作業をおこない、13人が食べたことになる。ここでは、調理された/garaは誰のもので、誰が誰を手伝い、誰が誰に食物をふるまったのかを特定することは困難である。彼女たちがおこなったさまざまな手伝いは、特定の個人に対して向けられたものではなく、この場全体に寄与して「共食」の場を造り上げるためのものなのである。

また、訪問者が食物持参で食事の場に参加し、自分は食物の供与を受けずに持参した物を食べるということがあるが、ここでも食物が誰から誰に渡されたかということよりも、食べるという行為

表12 事例2に関与した人々

個人名	性 年齢	提供	作業	消費
Gu	女 老年	場所、杵、臼	○	○
Ko	女 老年	水	○	○
Be	女 老年		○	
Gk	女 老年	≠o:ri	○	○
Ka	女 老年	/gara	○	○
Na	女 壮年	≠nao	○	○
!Ganashie	女 子供	≠nao	○	○
!Naoshie(0)	女 子供	≠nao	○	○
//Karama(0)	女 子供	≠nao	○	○
Tonaki(K)	女 子供		○	○
TA	男 老年			○
KM	男 老年			○
HK	男 壮年			○
//Na:ma	男 子供			○

を共有することが彼女たちにとって重要なのだと解釈できる。

調理において見られた「自発的な手伝い」は裁縫や編み物¹²⁾、ビーズ細工や皮のエプロンなどの工芸品作り¹³⁾においても見られる。「持ち主」がほとんど縫わなくても、数人の女性が少しずつ縫って手伝うことによって1つの工芸品が完成することさえある。このような手伝う行為を彼女たちはしばしば「tsawa (tsaonの音便化) ma:」と表現する。tsaonとは「作る」、ma:とは「与える」という意味なので、まさに日本語の「作ってあげる」に対応する。この行為は無償の行為であり、たとえ現金などの報酬を与えたとしても、これは「支払う」とは言わずに「お金をあげる」と表現すべきことだという。サンたちの間での「tsawa ma:」は、無報酬であることが多い。

女性だけでなく男性の間でも頻繁に「tsawa ma:」がおこなわれる。とくに皮製品をめぐる、皮なめし、皮の裁断¹⁴⁾、縫製などのプロセスに、しばしば複数の男性が自発的に手を貸す。また、手伝うだけでなく、なめす前の皮を無償で譲り渡す場合もある。表13と表14に皮の敷物をめぐる物や行為のやりとりの例をまとめた。

HKにHO(父)とNU(N)とTS(C)の3人がそれぞれ1枚ずつスプリングボックの皮を与えた。HKはその3枚の皮をなめして、切って、縫い合

表13 HKの皮の敷物作りに関与した人々

個人名	血縁関係	提供・作業	報酬
HO	父親	ｽﾌﾟﾘﾝｸﾞﾎﾞｯｸの皮1	なし
NK(N)	-	ｽﾌﾟﾘﾝｸﾞﾎﾞｯｸの皮1	なし
TS(C)	-	ｽﾌﾟﾘﾝｸﾞﾎﾞｯｸの皮1	なし
HK	本人	皮なめし、裁断、縫製	-
KH(P)	いとこ	縫製	なし
KM	-	縫製	なし

表14 Ba(K)の皮の敷物作りに関与した人々

個人名	血縁関係	提供・作業	報酬
NS(L)	いとこ	ｽﾌﾟﾘﾝｸﾞﾎﾞｯｸの皮1	なし
TB(K)	義理の兄	皮なめし、裁断、縫製	砂糖(1 kg)
KT	求婚者	縫製	なし

わせた。皮の縫製にはKH(P)(父の弟の息子)とKMが手伝った(表13)。ある時観察した皮の縫製の手伝いを以下に示す。

事例3 91年1月13日 HKの小屋の前

- 9:20 HKが自分の皮を縫い始める。
- 11:15 HKが仕事をやめて昼寝をしだす。
- 11:20 HKの側にいたKH(P)が勝手にHKの皮を縫い始める。
- 11:28 KMも加わってKH(P)と2人でHKの皮を縫う。
- 12:10 KMが縫うのをやめてその場を立ち去る。
- 12:36 KH(P)も縫うのをやめる。

このように手伝いを開始するのもやめるのも自発的におこなわれる。なお、HKはこの皮の敷物売って90pula(1pulaは約70円)を得たが、KH(P)やKMに労賃を支払ったわけではない。

表14は、敷き皮の持ち主が女性の場合の例である。Ba(K)に、NS(L)(父の妹の息子)がスプリングボックの皮を1枚与えた。その皮をTB(K)(姉の夫)がなめして、裁断して、縫った。縫製を求婚者であるKTも手伝った。Ba(K)は一切作

業に関わらず、NS (L) からTB (K) に直接皮が渡され、KTが自発的に縫製に加わった。この工程の間、所有者であるBa (K) は、まったく作業を指示するわけでもなければ責任らしきものを負っているわけでもなく、所有者としての彼女の名前は、いわば人々によって張られたラベルのように存在していた。

このような特徴は所有者が男性である場合でも見られる。人々の間で作業の全体像は共有されており、所有者がほとんど何もしなくても人々の自発的な手伝いによって工芸品が完成する。

6. 考 察

6-1 協同作業と同調的行動

調理、小屋作り、工芸品作り、縫い物などのキャンプ内での活動は、しばしば協同でおこなわれる。建材取りは、採集活動で唯一協同が認められた活動だが、キャンプでの小屋作りの延長と捉えることができる。男性の工芸品作りなども含めたサンの協同作業には、次のような特徴がある。

①どの作業も一人で最初から最後まで遂行することが可能であり、基本的に他人の助けを必要とするものではない。これは、狩猟採集民についてしばしば指摘される「自律性 (autonomy)」の一側面でもある。また、仕事が専門化しておらず、どの人とも、いつでも仕事を交換できる。②仕事が交換可能といっても、彼らは産業社会の労働者とは異なる。彼らは雇用主によって配置されているのではなく、主体的な行為者として協同的に他の人々と関わっているのである。また、手伝ったからといって必ずしも報酬を期待できず、作業に参加することそれ自体に意味がある。③作業の結果できる物（料理や工芸品、小屋など）は誰の物か決まっているが、その所有者が指揮をとったりして、作業を方向づけることはほとんどない。極端な場合、所有者が何もしなくてもまわりの人間が勝手に作ってしまうことさえある。

つまり、サンの協同作業とは、人々が作業の全体像を共有して自発的に共に行動することである。また、作業の結果の産物の所有者は、作業や物に

対する責任や権利を主張するものではなく、張りつけられたラベル（市川，1991）のようなものである。

このような協同作業が可能になる行動基盤として同調があげられる。市川浩（1975，1984）は他者との関係において起こる一種の感応ないし共振を「同調」と呼び、起こり方の形式面から同型的同調と応答的同調にわけた。スポーツや音楽、手術などのチーム・ワークにおいては、相手の動作に同型的に同調したり、応答的に同調したりしている。また、応答的に同調している場合でも、潜在的なレベルでの同型的同調を前提としており、これらと現実的動作の円環が形成されることによって、共有される行動の場が生成し、共同行動が可能になるという。

サンがあたかも一人の人間が作業しているかのごとく「息のあった」協同作業を展開するのはかれらが主体的な行為者として他人と関わり、応答的に、あるいは同型的に同調しているからなのである。

この同調性は協同を前提としない採集活動においても顕著にみられる。採集活動における同調も、誰かに一方的に統率されているのではなく、個々人が主体的にさまざまなレベルで自分の行動を調節して達成されることを確認しておきたい。自律的に行動する個人が、同時に集団のメンバーとして行動するとき、活動の同調性は集団のまとまりを維持する働きがあると考えられる。

6-2 活動の共有

サンの食物分配の例から、獲物の肉の分配のときにみられる親族構造に沿った分配と、料理の供与などのときにみられる親族構造によらない分配様式があることがわかった。サンの肉の分配は、第1次分配は狩猟に参加した者の間で役割に応じて、第2次分配は近い親族の間でおこなわれる（Marshall, 1976: pp. 297-298; Tanaka, 1980: pp. 95-96）。とくにクン・サンの場合、第2次分配の段階で、まず妻の両親に、ついで自分の両親に分配しなければならない「義務」が存在するという（Marshall, 1976: p. 298）。狩猟採集民にお

ける肉の分配は親族組織に対応している場合が多く (Testart, 1987), 親族組織は人々を義務のもとに配置するものである (Ingold, 1988)。

一方, 料理の供与は個人的な「親しい」間柄の人におこなわれる。「親しさ」は, 料理の分配のときだけでなく, 採集行のグルーピングや, 小屋や工芸品作りの手伝いなどにおいて誰と関わるかを決定する重要な要因であり, ささいな手伝いや日常的な交渉によって築かれたものである。

セントラル・カラハリ・サンの社会交渉には, 規則に基づいたフォーマルなものと, 対面的相互行為によって築かれたインフォーマルなものが並存しており, 後者はとくに女性が関与する交渉において顕著である。しかし, 男性どうしの付き合いも含めて, サンの社会のさまざまな交渉はインフォーマルに進められることが多い。サン自身も 'haba:' と, '／do:' という行為を区別しており, 'haba:' はその場にいる人に分けへだてなく配る「分配」にあたるが, '／do:' は「好きな人にだけ与える」ことだという。

社会的交渉を統御する構成概念として, Gibson (1985) は親族関係と仲間意識 (companionship) の2つを挙げている。彼によれば, 前者は肉体および霊的な物質の共有をもとに築かれ, 支配-依存関係と結びついている。一方, 後者の仲間意識は活動の共有をもとしており, 対等性と自律性という価値と結びついている。仲間意識は, 共有された活動そのものの中に存在し, 繰り返しておこなわれる協同によって生成される (Gibson, 1985)。

サンの社会においても, これら2つの概念はさまざまな社会交渉を支えており, とくに, 活動の共有は彼らの社会生活にとって最も重要なものである。採集や狩猟あるいは訪問に一緒に行った体験は繰り返し語られる。人々が他人の多量の肉や採集食物を見て羨望を感じるのは, それらの食物に対してだけでなく, それを得た体験そのものへの羨望でもある。また, 獲物の解体, 小屋作り, 工芸品作りなどさまざまな仕事でみられる協同は, 役割分担し, 協力して助け合い, 仕事の効率をよくするという技術的次元だけでなく, 人々と活動を共有するという社会的次元においても彼らにとっ

て重要である。さらに, 食物などの分配も, 「分配する-分配される」という行動そのものや, 分配された食物を共に食べるという行為に注目すれば, これも共有された活動とみなされる。

以上のような, 分配や協同の社会的次元をも含めたさまざまな対面的相互交渉による行為や物質の分かち合いを統御するシステムを, ここでは「シェアリング・システム」と呼ぶことにする。

Ingold (1988) は, 協同行動の技術的側面のみを co-operation と呼び, 協同行動の社会的次元を sharing に含めた。そして, 狩猟採集民における生産様式を生態的 (物質的) 次元と, 社会的次元に分け, 前者の機械的な力を co-operation, 後者の社会関係のシステムを sharing と定義した。彼によれば, sharing と co-operation は車の両輪のように同時に進行するという。

シェアリング・システムに含まれる協同と分配については, 例えば Turnbull (1966) がムブティのネット・ハンティングについて「猟での役割に応じて肉が分配される」と記述しているように, 個人をめぐる役割と報酬としての捉え方がある。しかし, サンにおいて観察された調理や工芸品作りへの無報酬での手伝いは, 労働と報酬という点からだけでは説明できない。協同と分配は互いに連関しているが, 直接の原因と結果としてではなく, とともにシェアリング・システムに統御されたかたちで相互につながっているのである。

フォーマルな肉の分配においてさえ, 再分配の結果, キャンプに居合わせるすべての人々に分け与えられていた (Tanaka, 1980)。これは, その狩猟において何ら貢献しなくても, ただそのとき空間を共にしていたという理由だけで, 同じキャンプの住人はもちろん, たまたま居合わせた訪問者にまで肉が分けられたのである。したがって, 彼らにとってはあらゆる場面に参加し, 共有することの方が本質的であり, 協同や分配はそのシェアリング・システムの中での出来事のようなものと考えることができる。

シェアリング・システムは, サンが遊動生活を送っていたころはキャンプを単位として機能していた。狩猟や採集に共に行くのも, 小屋や道具作

り、調理の手伝いも、食物の分配もすべて基本的にはキャンプのメンバーでおこなわれていた。したがって、シェアリング・システムのために組織化されるメンバーも、シェアリング・システムが実行される空間もキャンプを単位としたものであった。キャンプという居住空間上の単位が、シェアリング・システムによって支えられ、社会的に機能していたのである。

このように、シェアリングはキャンプにおいておこなわれたが、キャンプそのものは、資源状況や協同の必要性に応じて離合集散し、決して閉鎖的なものではなかった。キャンプのメンバーシップも「内と外」という排他的で明確な境界を持つものではなく、個々人からみた「親しい人々」の最大公約数的集まりとも言えないこともない。キャンプがシェアリングの単位として機能していたのは、キャンプが他のキャンプと空間的に離れており（Tanaka (1980)によれば、通常10km以上）、個々の対面的相互交渉の場とキャンプが一致していたからであると考えることができる。

採集や狩猟活動はたとえ一人でおこなったとしても、その結果得た野生食物は、キャンプまで運ばれ人々と共有すべきものとしてある限り、やはり社会的活動の一形態と位置づけられる。たとえば単独の猟で獲物の捕獲、追跡、運搬のすべてを一人でおこなったとしても、肉がキャンプへ運ばれて人々に分配される物であることを前提として狩猟が意図的におこなわれる点でこの行為は社会的な行為である。狩猟をおこなうときのハンターは非社会的な個体であり、分配をおこなうときの彼は社会的な人間であるというように、一人の行為を分断することはできない。

採集活動も同様に、情報交換によって採集地の選択をおこない、採集によって得られた野生植物は少なくとも家族に分配される。また、調理された食物は家族以外にも分けられ、多くの人々と共に消費される。

Ingold (1986) が明言するように、野生資源の抽出(extraction)の前後に意図的な計画と追跡、そしてキャンプまでの運搬という延長したプロセスを含むという点で、狩猟と採集は他の霊長類にもみられる

捕食(predation)や採食(foraging)とは異なる。つまり、採集や狩猟は主体的な人間の関わり合い(mutual involvement)としてのシェアリングの一環として存在している。まさに、シェアリングとは生産から消費までを統御する社会-経済システムなのである。

6-3 近代化とシェアリング

前節まで、サンのシェアリング・システムについて、彼らが狩猟採集を中心とする伝統的な遊動生活を送っていたころをモデルに説明してきた。ところが、近年の定住にともなう近代化の影響によって、彼らのシェアリング・システムは以下のように変化しつつある。

まず、肉が現金で売買されるようになり、狩猟で得た肉は貨幣に形をかえて蓄積可能になった。肉を買うのは主に工事関係者、政府職員、教員といった外来者であり、肉は商品化されてサン以外の人々に流出している。また、配給または購買によって得たトウモロコシ粉などの食料品に食生活を依存させるようになった。貨幣経済は今や無視できないほど彼らの生活に浸透しているが、ここではシェアリング・システムの連環が断ち切られつつあることだけを指摘するにとどめたい。

協同作業における人と人の主体的なつながりを断ち切る他のシステムも存在している。あるカラハリの男が、「雇用主」としてサンに工芸品作りを分業させるようになったのである。サンたちは皮なめしなど個別に依頼された仕事をおこない、報酬として「雇用主」から現金を受け取る。ここには作業の全体像の共有がなく、分断された仕事を労働と報酬という形で受け持っているだけである。

以上は、カラハリや貨幣経済といういわば「外部」接触による変容であるが、定住をきっかけに彼ら自身のシェアリング・システムの矛盾が「内側から」もあらわになっている。

シェアリングは各キャンプを単位として機能していたが、それは具体的な相互交渉の場と具体的に輪郭をもったキャンプという空間が一致していたからであった。彼ら自身はキャンプを抽象的

な概念として認識していたわけではない。現在、定住によってキャンプの輪郭が曖昧になり、シェアリングそのものの存続が危機にさらされつつある。今や、同じキャンプに住んでいるからといって、肉や他の食物の分配にあずかるとは限らない。狩猟や採集に一緒に行くメンバーも任意であり、同じキャンプの人と行動を共有するとは限らない。ついにはキャンプという共同体は崩壊して、人々は自己中心的な視点で築いた「親しい」世界に埋没していくのだろうか。

従来、狩猟採集民は自律的で生存に必要なものの獲得に他人を頼るわけではない（Woodburn, 1982）。また、狩猟採集民はしばしば「個人主義的」な人々であるともいわれる。しかし、一方ではシェアリングを基盤として、相互依存的な社会を形成しているのである。

本稿で明らかにしたように、サンは手助けが不要なささいな作業においても他人と関わり合い、その関わり方と人数において「過剰」でさえある。また、たかだか臼一杯の野草について「8人が物を提供し、10人が作業をおこない、13人が食べた」例からもわかるように、彼らのシェアリングはもはや実用性を越えている。彼らにとって行為や物を分かち合うことは、たんに生存のためだけではなく、「このようにして我々は生きてきたのだ」という彼らのやり方を確認し、「生き直す」場として存在している。その意味において、彼らが日々くりかえすシェアリングは一種の儀礼の場を提供しているともいえる。

完結した経済システムとしてのシェアリングの機能が変容しつつある現在、シェアリングの儀礼的側面がより強調される。シェアリングの場に参加し、その場を作り上げること自体が彼らにとって重要なのである。義務に応じて分配するのではなく、具体的な対面的相互行為によっておこなう彼らのシェアリングは、他人とあらたな関係を再生していく力をはらんでいる。

サンの社会における相互行為の重要な特徴として、同期的な採集活動や、同時発話（Kitamura, 1990, 菅原, 1991）、即興的な歌や踊り（今村, 1991）などの高い同調性があげられる。このよう

な同調性はシェアリングを含めたかれらの社会の成り立ちを根底から支えているのである。サンの社会が今後どのように変化していくかを探るには、経済的現象の変化だけでなく、日常的な社会的相互行為の特質がどのように変容するかを検討していく必要がある。

謝 辞

本研究は、昭和63年度、平成元年度、平成2年度の文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による「アフリカ伝統社会の持続と変容に関する生態人類学的研究」の一環としておこなわれた。

調査をおこなうにあたって、研究代表者である田中二郎教授（京都大学アフリカ地域研究センター）から、調査の遂行から論文執筆にいたるまで終始ご指導と助言をいただいた。

南アフリカ共和国、Witwatersrand大学のTrefor Jenkins教授には、ひとかたならぬお世話になった。心からお礼を申し上げたい。ボツワナ共和国政府の行政官の方々、とくに大統領府の常任秘書官Gopolang女史にはたいへんお世話になった。Ghanziの野生動物局の佐方御夫妻には調査中、貴重な御協力と暖かいもてなしをいただいた。また、De Kar在住のBraam le Roux御夫妻からは御好意を賜った。

調査をまとめるにあたっては、西田利貞教授をはじめとする京都大学理学部人類進化論研究室の皆様から、ゼミでの討論を通じて多くの貴重な助言をいただいた。また、菅原和孝助教授（京都大学）および北村光二助教授（弘前大学）より、サンの行動学的分析について多大の重要な批判と示唆をいただいた。

記して、以上の方々に謝意を表したい。

最後に、私が傍らに住まうことを受け入れ、多くのことを忍耐強く教えて下さった、サンの友人たちに心から感謝の意を捧げたい。

注

- 1) 井戸から西に約10km離れたところにサンの孤立キャンプが1つある。
- 2) !Kung San の人口学的研究では16~18才と報告されている (Howells, 1979)。
- 3) ただし、子どもが水汲みに行く場合は、少女が連れだってバケツを頭に乘せて汲みに行ったり、少年が数人でろばに乗って汲みに行ったりしていた。
- 4) ただし、菅原 (1987) は、「青年男性はしばしば徒党を組んで」訪問すると述べているし、Camp T に集団で訪ねてくる男性もしばしば見られたので、訪問を単独で行うか否かはメンバーシップの性年齢構成によって異なるかもしれない。
- 5) 重い荷を担いで立ち上がる、背中の荷物を自分で直す、という動作はいずれも掘り棒を使うことによって一人でもできる (掘り棒の多様な使用方法については、今村、準備中を参照)。
- 6) 「a:kwa i:」直訳すると「このようである」。「世の中とはこのようなものだ」の意味であろう。
- 7) この事例にあるように、採集物の分配は採集地では一般におこなわれない。
- 8) 集まりと近接 (菅原の定義では2m以内にいる2個体の状態) の違いは、例えばひとつの集まりに男女が混在して男性どうし、女性どうしが寄り集まってすわる場合、集まりとしては男女一緒だが、近接の点からは男女は分離していると言える。「近接」という概念は個体間の具体的な接触や相互作用の分析に必要なが、広く相互交渉の場を扱う場合、「集まり」という概念も有効であると考えられる。
- 9) サンの食事は1日何回と決まっているわけではない。採集に行った日は夕方に1回だけ調理することもある。採集に終日居て7~8回食事をおこなうこともある。
- 10) Guは寡婦であり、一人息子のNKも道路工事に従事しており月末の数日を除いてキャンプに不在である。したがって、Guが家族外の人に食事を提供するのは彼女に同居している家族がおらず、かつ息子の現金収入を期待できるという「特殊な」状況によるという疑問も起こり得る。この疑問に答えるため、Koについての同様のデータと比較する。Koと世帯を共にする家族は、彼女自身と夫 (TA) と未成年の娘1人 (Ganashie) の3人である。Koは、41回の食事で延べ187人の家族以外の成人に食物を供し、1回あたり4.6人に配ったことになる。Guも1回あたり4.6 (436/94) 人に配っており、Koと大差がない。したがって、Guの場合を著しく特殊な例と見なす必要はない。なお、この論文では例数の多いGuからの供与のみを分析した。
- 11) 一般に、食事の場にいる子どもへは、誰の子であろうと必ず食物が提供される。したがって、Guの食事においても毎回数人の子どもに食物を与えていたが、本研究では成人のみを対象に分析している。
- 12) 裁縫も編み物も最近になって入ってきたようである。現在30歳代以下の女性はワンピースやスカート、また、子どもの負い紐を自分で縫う。編み物も盛ん

で、古毛糸をほどいては帽子やポシェットを編んでいる。

- 13) 現在、工芸品はハンシー・クラフト社に買い上げられ、彼らの重要な現金収入源になっている。
- 14) 皮を切るときに製品のデザインが決まるので、「(切る場所や切る方向を) よく知った人でなければならない」と彼らは言う。

引用文献

- Cashdan, E. A., 1985, Coping with risk: reciprocity among the Basarwa of northern Botswana. *Man* (N.S.) 20: 454-474.
- Draper, P., 1976, Social and economic constraints on child life among the !Kung San. In (R. B. Lee and I. Devore eds.) *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*. Harvard Univ. Press, Cambridge, pp. 199-217.
- Gibson, T., 1985, The sharing of substances versus the sharing of activity among the Buid. *Man* (N.S.) 20: 391-411.
- Howells, N., 1979, *Demography of the Dove !Kung*. Academic Press, New York.
- 池谷和信, 1989, 「カラハリ中部・サンの狩猟活動ー犬猟を中心にしてー」『季刊人類学』20(4): 284-332。
- 池谷和信, 1991, 「セントラル・カラハリ・サンのヤギ飼養について」, 田中二郎・掛谷誠編, 『ヒトの自然誌』, 平凡社, pp. 253-269。
- 今村 薫, 1991, 「サンの日常と歌」, 田中二郎・掛谷誠編, 『ヒトの自然誌』, 平凡社, pp. 91-105。
- 今村 薫, 1992, 「セントラル・カラハリ・サンにおける採集活動」, 『アフリカ研究』41: 47-73。
- Ingold, T., 1986, *The Appropriation of Nature: Essays on Human Ecology and Social Relations*, Manchester Univ. Press, Manchester.
- Ingold, T., 1988, Notes on the foraging mode of production. In (T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn eds.) *Hunters and Gatherers I*. Berg, Oxford, pp. 269-285.
- 市川 浩, 1975, 『精神としての身体』, 勁草書房。
- 市川 浩, 1984, 『〈身〉の構造ー身体論を超えて』, 青土社。
- 市川光雄, 1982, 『森の狩猟民』, 人文書院。
- 市川光雄, 1991, 「平等主義の進化史的考察」, 田中二郎・掛谷誠編, 『ヒトの自然誌』, 平凡社, pp. 11-34。
- Kimura, D. and H. Ihobe, 1985, Feral cattle (*Bos taurus*) on Kuchinoshima, southwestern Japan: Their stable ranging and unstable grouping. *J. Ethol.*, 3: 39-37.
- Kitamura, K. 1986, Behavioral bases of egalitarianism in the San society. In (J. Tanaka ed.) *A Study on Human Behavior and Adaptation in Arid Area of Africa 1986*, Hirosaki Univ., pp. 23-28.
- Kitamura, K. 1990, Interactional synchrony: A fundamental condition for communication. In (M. Moerman and M. Nomura eds.), *Culture Embodied*, Senri

- Ethnological Studies 27, National Museum of Ethnology, Osaka, pp. 123–140.
- Kummer, H., 1971, *Primate Societies: Group Techniques of Ecological Adaptation*. Aldine Publishing Co.
- Leacock, E. and R. Lee, 1982, Introduction. In (E. Leacock and R. Lee eds.) *Politics and history in band societies*, Cambridge Univ. Press, Cambridge, pp. 1–20.
- Lee, R. B., 1979, *The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*. Cambridge Univ. Press, London.
- Marshall, L., 1960, !Kung bushman band, *Africa* 30: 325–355.
- Marshall, L., 1961, Sharing, talking and giving: Relief of social tensions among the !Kung bushmen, *Africa* 31: 321–349.
- Marshall, L., 1976, *The !Kung of Nyae Nyae*, Harvard Univ. Press, Cambridge.
- Osaki, M., 1984, The Social influence of change in hunting technique among the Central Kalahari San. *Afr. Stud. Monogr.*, 5: 49–62.
- Shostak, M., 1981, *Nisa*. Harvard Univ. Press, Cambridge.
- Silberbauer, G. B., 1972, The G/wi Bushmen. In (M. G. Bicchieri ed.) *Hunters and Gatherers Today*. Holt, Rinehart and Winston, New York, pp. 271–325.
- Silberbauer, G. B., 1981, *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*. Cambridge Univ. Press, London.
- 菅原和孝, 1984, 「狩猟採集民社会における個体間の近接と身体接触—セントラル・カラハリ・サンの事例から—」『季刊人類学』15: 78–141。
- 菅原和孝, 1986, 「ブッシュマンの日常行動と集団構造」, 伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学—アフリカに生きる—』, アカデミア出版会, pp. 111–145。
- 菅原和孝, 1987, 「セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面的相互行為—!Koi!kom 定住地での訪問活動の観察より—」『国立民族学博物館研究報告』12(4): 1031–1111。
- 菅原和孝, 1991, 「サンの会話構造—長い語りを中心に」, 田中二郎・掛谷誠編, 『ヒトの自然誌』, 平凡社, pp. 107–164。
- Sugawara, K., 1991, The economics of social life among the Central Kalahari San (G//anakhwe and G//wikhwe) in the sedentary community at !Koi!kom. In (N. Peterson and T. Matsuyama eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers*, Senri Ethnological Studies 30, National Museum of Ethnology, Osaka, pp. 91–116.
- 田中二郎, 1971, 『ブッシュマン—生態人類学的研究—』, 思索社。
- 田中二郎, 1978, 『砂漠の狩人—人類始源の姿を求めて—』, 中央公論社。
- Tanaka, J., 1980, *The San, Hunter-Gatherer of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*. Univ. of Tokyo Press, Tokyo.
- Tanaka, J., 1987, The recent changes in the life and society of the Central Kalahari San. *Afr. Stud. Monogr.*, 7: 37–51.
- Tanaka, J., 1991, Egalitarianism and the cash economy among the Central Kalahari San. In (N. Peterson and T. Matsuyama eds.) *Cash, Commoditisation, and Changing Foragers*, Senri Ethnological Studies 30, National Museum of Ethnology, Osaka, pp. 117–134.
- Testart, A., 1987, Game sharing systems and kinship systems among hunter-gatherers. *Man* (N.S.) 22: 287–304.
- Thorpe, W., 1963, *Learning and Instinct in Animals*. Methuen, London.
- Turnbull, C., 1965, *Wayward Servants: The Two Worlds of the African Pygmies*. Natural History Press, New York.
- Wiessner, P., 1982, Risk, reciprocity and social influences on !Kung San economics, In (E. Leacock and R. Lee eds.) *Politics and history in band societies*, Cambridge Univ. Press, Cambridge, pp. 61–84.
- Wilson, P. J., 1975, The promising primate. *Man* (N.S.) 10: 5–20.
- Woodburn, J., 1982, Egalitarian societies. *Man* (N.S.) 17: 431–451.